

第 65 期執行委員会の発足にあたって

7月1日から第65期中央執行委員会が発足しました。今期は新委員長の元に心機一転、これからの一年間活動していきます。

一昨年の福島原発事故から2年以上たった今もなお、住み慣れた土地に戻れずに避難生活を余儀なくされている方が大勢おられます。事故直後は、政府を挙げて「脱原発」への動きがありましたが、政権が交代するとともに、事故原因の究明もそこそこに「原発再稼働」の動きが出てきました。これからの原子力をどうするのか、エネルギー政策をどうするのか、明確な方向性が示されないまま、原子力発電依存へ、と戻ってしまいそうな気配です。

このような状況の中、原子力機構では、もんじゅの点検に関する保守管理不備、J-PARCの放射性物質漏えい事故と、相次ぐ不祥事で理事長が交代しました。機構における安全文化が劣化していると評価され、文部科学省に「日本原子力研究開発機構改革本部」が設置されて機構の改革が議論されています。しかし、「安全文化の劣化」という視点だけでは、問題の根を見ているとは思えず、問題の改善につながる改革になるのか懸念されます。

一方、我々職場の処遇においては、機構は、国からの要請に応え、昨年「臨時特別措置」として給与の大幅な削減を一方実施しているなか、6月期一時金においても全職員に対して9.77%の削減を一方実施しました。さらに、退職金についても国べったりのやり方で、違法性があることを認識しているにもかかわらず、不法な減額を提案してきました。

こうした厳しい状況の中、原研労組の運動がこれまで以上に重要になります。労組では組合員の現状を把握し、今後の活動方向の参考とするため、組合員へのアンケートを実施する予定です。

原子力機構にも、労働組合にも、難しい課題がたくさんあるこの時、冷静な思考に基づき、活発で自由な意見交換を行い、強い団結で進んで行きましょう。この一年間、よろしくお願いします。

第 65 期中央執行委員会役割分担〔任期：2013年7月1日～2014年6月30日〕

任務 (書記局)	氏名	外部担当 担当支部	職場電話	所属分会
委員長	花島 進	特法連	81-6316	原科研 核物理分会
副委員長 (研究対策)	湊 太志	-	81-5803	先端基礎
書記長	熊田 政弘	-	81-3708	原科研 化学分会
会計 (教宣)	小松崎 賢治	科労協幹事 特法連幹事	82-61341	核サ研分会
総務 (組織)	津村 貴史	-	81-5886	原科研 JRR-3分会
賃金厚生	小沼 勇	大洗支部担当	83-7458	大洗研 管理分会

退任にあたり

岩井 孝(第 64 期中央執行委員長)

ここ 10 数年間、中央執行委員を続けてきましたが、このたび、中央執行委員の任から退くことにしました。退任にあたり、思うことを書かせていただきます。

原研労組の誇るべき伝統として、原子力に携わる者として国の原子力政策や原子力利用のあり方、とりわけ、安全問題を正面からとらえ、自由闊達に議論し、自らの考えを職場の内外に表明していくことが挙げられます。自らの職場の業務と存在意義をきちんと認識し、議論し、意見を表明することも重視してきました。そのような活動が、国民のみなさんからの信頼の確保と、自らの職場の維持発展に寄与しています。

約 2 年前の福島第 1 原発事故の重大さとその影響の甚大さは、私自身としても、非常にショッキングなことでした。この事故やその影響は全く収束していません。ひとりの国民の立場からは「あってはならない事故」であり、原子力に携わる者としては「起こしてはならない事故」です。原研労組としてこの事故を正面からとらえ、検討し、声明を出すなどしたことは誇るべきことです。原子力利用について組合員の中に様々な意見があります。労働組合として重要なことは、それらの意見を自由に表明することを保障することです。

職場環境や処遇の面では、「行政改革」の名の下に強烈な嵐が何度もおそいかかりました。公務員いじめに連動した処遇改悪は今も進行中です。政府の露骨な押し付けも横行しています。2005 年には統合という大きな変化があり、統合後の処遇をめぐる様々な問題が発生しました。原研労組の活動により、いろいろな改善を勝ち取り、改悪を少しでも食い止める防波堤の役目を果たしています。ひとつを例に挙げれば、人事評価の問題です。統合後に人事評価制度を一本化するための交渉の中で、労組として「サイクル機構で行われて来た『相対評価』は認められない。原研で行われて来た『絶対評価』にすべきである」と強く主張し、具体的な問題も指摘した結果、機構当局は『相対評価』の問題を認め、現在の『絶対評価』方式を採用しました。サイクル機構労組を脱退し、原研労組に加入する方がいたこともあり、サイクル機構で長年低い級に留め置かれた多くの方を昇級させることができました。

これからも、職場のあり方や処遇について、様々な問題が生じてくると思います。『自ら考え、言うべきことははっきり言う』『組合員個人が困った時にも労組として取り組む』という原研労組の存在は、一層重要になります。労働組合は、ひとりひとりが集まって、初めて成り立ちます。厳しい状況の時こそ、あきらめず、ひとりでも多くの職員が原研労組に加入され、取り組みが強化されることを望みます。私自身は、職場にいるかぎり、原研労組の一員であることに誇りを持ち、少しでも貢献したいと思います。

第 64 期中央執行委員を終えるにあたって

橋本 慎太郎(第 64 期中央執行副委員長)

長いようで短い一年でした。今回初めて中央執行委員を務めさせていただきましたが、次々と襲いかかって来る難問に振り回されるだけで過ぎてしまったように感じます。例の給与の臨時特例措置は丁度一年前に始まり、その後も、独立行政法人通則法の改悪の問題、職員宿舎の削減、退職金の大幅削減の提案などの難問がつけつけられました。週に一度の中央執行委員会では、何か解決の糸口はないかと夜遅くまで議論を重ねたのを思い出します。これらの課題の多くは未解決のままですが、次期執行委員の方々の活躍を期待しつつ、一組合員として何らかの貢献ができればと思っています。

ただ個人的には、この活動を通して多くのものを得ることができました。様々な業務、立場、年代の方と話しをする機会があり、その方たちがもっている考え方や抱えている問題に触れて、ありきたりではありますが、以前と比べて広く多様な視点で物事を見ることができるようになったのではないかと思います。労働にかかる知識や考え方についても学ぶことができましたし、議員会館に足を踏み入れるなどの貴重な経験もさせてもらいました。活動は楽ではありませんでしたが、興味深く楽しい時間を過ごすことができました。どうもありがとうございました。